

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月29日現在

機関番号：12201

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2010～2011

課題番号：22810004

研究課題名（和文）タンザニア南東部コミュニティにおける女性世帯主世帯の脆弱性と自在性

研究課題名（英文）Vulnerability and Maneuverability of Female Headed Households in Communities of Southeast Tanzania

研究代表者

阪本 公美子（SAKAMOTO Kumiko）

宇都宮大学・国際学部・准教授

研究者番号：60333134

研究成果の概要（和文）：

タンザニア南東部の母系の社会では、離婚女性などの女性世帯主世帯やシングル・マザーが目立つが、彼女たちの脆弱性と自在性、コミュニティ内の相互扶助ネットワークの内包性について、質問票調査やライフ・ヒストリーの聞き取りから明らかにした。女性世帯主世帯は、夫婦世帯と比較すると食料生産が不足することが多いが、収入の有無では顕著な差はなく、若い未婚女性や離婚女性は商売、年配の寡婦の女性は（個人差は大きかったが）周囲による生計戦略がみられた。他方、独立以前の母方居住の時代は男性が結婚前に婚労働をし、出産後、女性の判断で未婚の事例もあるのに対し、ウジャマー集村化した現在は、男性の判断によって未婚である事例が目立つ。

研究成果の概要（英文）：

There is a substantive presence of female headed households (FHH), especially divorced mothers, and single mothers in matrilineal southeast Tanzania. Vulnerability and maneuverability of and their inclusion within the community have been evaluated through questionnaire and life history interviews. More FHH, in comparison to male headed households, tend to lack food, however, explicit difference in income was not seen. Young unmarried and/or divorced women cope by doing business, whereas widowed women can rely on others (though difference was seen between individuals). From a historical perspective, there was a case of a woman who decided not to marry the father of a child after he failed to prove his ability to work hard through bride labor when they lived matri-locally in the past, whereas with patrilineal influence today, there are many cases of single mothers based on the men's decision not to marry.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,240,000	372,000	1,612,000
2011年度	1,140,000	342,000	1,482,000
総計	2,380,000	714,000	3,094,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：ジェンダー

キーワード：アフリカ、ジェンダー、家族・親族・人口、女性、母子、タンザニア

1. 研究開始当初の背景

大量生産・大量消費・大量廃棄を奨励し、男女分業によって男性を労働者、女性を再生産者としてみなす社会のあり

方は現在問い直されつつある。そのような背景の中、アフリカにおける「貧困」地域において、インフォーマルな人間関係のネットワークを活用し、大量生産ではなく生き

るための再生産活動と自在性を重視した内発的発展には、先進国のあり方への示唆を含む地域的意義があることを、科研費「東アフリカ小農による内発的発展の特徴とその地球的意義」（若手研究B 2006-2008年）の中で明らかにしてきた（研究業績[8], [10], [11], [14]）。事例として詳細な調査を行ったタンザニア南東部では、貨幣経済の影響下においても農業による**食料生産を男女は重要な生活基盤とみなし、相互扶助の規範を維持**していた（研究業績[6],[12]）。

また、これまでの研究の中で、内発的発展の可能性を示唆しつつ、地域内、特に性別や年齢における認識の差異も明らかにしてきた（研究業績[1], [15]）。タンザニア南東部の母系的社会においても、夫の有無によって、女性の働くスタイルが二極化している。夫が不在の女性(未婚の母親、離婚、別居、死別)が世帯主となる「**女性世帯主世帯**」の数もタンザニアの父系的社会と比較しても目立ち、タンザニア南東部のムウェラ社会において「母系制社会が近代化によって歪められ」（Shuma 1994）、若年出産が増加したことを説明する先行研究もある。タンザニア南東部はモザンビークやマラウィ、古くは中央アフリカの母系ベルトと歴史的な関係があり母系的伝統を持つが、アラブ貿易によるイスラム化、ウジャマー集村化による母系的氏族の生活単位の崩壊により変容してきた。母系的社会においては、再生産が父系制社会とは異なる形で重要視されており、**母系的伝統とその変容が、現在の社会構造や現状に影響**を及ぼしているのは必至である。

他方、世界的な「**貧困の女性化**」が注目され、女性、特に女性世帯主世帯の**貧困が問題**とされているが、タンザニアにおいてはその真意が疑問視される先行研究もある。農村で行った参加型調査によると、女性世帯主世帯の**貧困が顕著に現れる**が、都市で行った定量的な所得調査では、女性世帯主は必ずしも**貧困とは限らない**（Narayan 1997）。本研究課題においては、**タンザニア南東部の農村の女性世帯主に焦点を当てつつ地域間比較**を行うことによって、「**貧困の女性化**」の実態を、**母系的伝統とその歴史的変容、構造的な脆弱性の有無、現代の男女の生活における自在性**

といった視角から解明する。

2. 研究の目的

世界の「**貧困**」は赤道アフリカ（以下アフリカ）に集中しているといわれているが、代表者はこれまで、経済自由化による動態に注意を払いながら、「**貧困**」地域の**内発的発展の研究**を通して、**国家・市場によって完全には「捕捉されず」（Hyden 1980）、「自在性」（内山 1999）を維持する状況**に注目してきた（研究業績[11]）。他方、社会構造の権力関係の中における弱者が存在することも事実であり、**貧困者に女性が多い状況は「貧困の女性化」（Muhutdinova 2006）**としても表現されている。代表者がこれまで研究してきたタンザニア南東部においても、女性、特に**女性世帯主世帯は、夫婦世帯とは異なる状況**にあり、**脆弱(vulnerable)な面も存在する**。他方、働き方に関しては**男女分業に捕われず、自在性を発揮している側面**もあった。本研究では、**女性の中でも貧困層と見なされる農村の女性世帯主世帯に注目し、その脆弱性と自在性の両面からその実態を、コミュニティ内の相互扶助関係も考慮した上で明らかにする**。

本研究課題においては、以下の2点について研究期間中に明らかにする。

(1) 〔事例研究〕女性世帯主世帯の状況と、相互扶助関係における**内包(inclusion)**と**排除(exclusion)**

女性世帯主に注目し、彼女たちの生活における状況と、コミュニティにおいてどの程度相互扶助関係に**内包**されているか、或いは**排除**されているか調査し、彼女たちの**脆弱性と自在性**について明らかにする。まず、これまで明らかにしてきた相互扶助の規範の中で、どの程度**女性（特に女性世帯主）が内包**されているか、**排除**されているかを明らかにする。その上で、タンザニア南東部等における**女性世帯主に対して、ライフ・ヒストリーを聞き取り、生活状況・土地へのアクセス・現金獲得活動等**についてインタビューをし、彼女たちの状況を把握する。

(2) 〔比較研究〕他地域との比較研究

女性世帯主とその世帯の状況、相互扶助関

係における女性の内包と排除（研究業績[6]、[12]）、貨幣経済と男女分業（研究業績[13]）について、他のタンザニアの地域やアフリカの母系的農村社会をはじめとする他地域の状況と比較することによって、社会構造と男女分業、広くは男女の生活のあり方を考察する。この際、母系的・父系的傾向や、歴史の変容についても考慮した上で比較研究を行う。

男女の働き方、男女分業や世帯のあり方は社会内部の権力構造を理解する上で、核心的な部分であるが、近年のアフリカの地域研究の多くでは副次的な扱いしか受けておらず、それを主題としたものは少ない。本研究課題によって、アフリカにおける母系的社会における「**貧困の女性化**」について、タンザニア南東部の母系的社会の現代的情况を、比較研究によって相対化し、伝統と近代の中で変容してゆく女性と男性のあり方という普遍的テーマについて成果が予想され、独創的かつ意義深い。

3. 研究の方法

研究方法は、社会の価値観を問い直す意味での**理論研究**を土台としつつ、綿密なフィールドワークに基づく地域研究による**事例研究**、事例研究をより広範にて位置づけた**比較研究**を融合することに学術的な特色があり、各領域の前提条件をも問い直す画期的な研究である。

研究対象地域は、これまで研究が手薄だったタンザニア南東部に焦点をあてながら、広く赤道アフリカの母系的農村社会をはじめとする他の社会と比較する点において独創的である。

より具体的には、赤道アフリカの母系的農村社会における「女性世帯主世帯」の状況、「**貧困の女性化**」、男女の自在性を明らかにするために、研究目標で述べた2項目について、以下の研究計画・方法によって遂行する。

(1) 【事例研究】女性世帯主世帯の状況と、相互扶助関係における内包と排除

タンザニアの母系的農村社会の女性世帯主に焦点を当て、ライフ・ヒストリーを聞き取るとともに、生活状況・土地へのアクセ

ス・現金獲得活動等について質問票に基づくインタビューを行い、彼女たちの状況を把握する。これまで明らかにしてきた相互扶助の規範の中で、どの程度女性（特に女性世帯主）が内包されているか、排除されているかを、上述の聞き取りやインタビュー、並びに参与観察等を通して調査する。

(2) 【比較研究】他地域との比較研究

女性世帯主世帯に焦点を当てて研究している研究者と情報交換を行い、比較研究を行う。特にタンザニアの他地域やアフリカの母系的農村社会をはじめとする他地域における研究との比較分析を行う。

【参考文献】

- Hyden, Goran, 1980, *Beyond Ujamaa in Tanzania: Underdevelopment and an uncaptured peasantry*, University of California Press, Berkeley.
- Narayan, Deepa, 1998, *Voices of the Poor: Poverty and Social Capital in Tanzania*, World Bank.
- Muhutdinova, Raissa, 2006, “Feminization of poverty”, Mehmet Odekon ed., *Encyclopedia of World Poverty*, Sage.
- Shuma, Mary, 1994, “The Case of Matrilineal Mwera of Lindi”, Zubeida Tumbo-Masabo and Rita Liljeström ed., *Chelewa, Chelewa: The Dilemma of Teenage Girls*, The Scandinavian Institute of African Studies.
- 内山節、1999年『市場経済を組み替える』農山漁村文化協会。

【研究業績】

- [1] SAKAMOTO Kumiko, 2009, *Social Development, Culture, and Participation*, Shumpusha.
- [2] SAKAMOTO Kumiko, 2009, “Patrilineal Influence of Islam in Name Inheritance and Structure in Southeast Tanzania”, *Journal of the Faculty of International Studies, Utsunomiya University*, no.27, pp.55-74.
- [3] 大林稔・石田洋子編著、阪本公美子他16名（50音順）著、2009年『アフリカにおける貧困者と援助—政策市民白書2008—』晃洋書房。
- [4] SAKAMOTO Kumiko, 2008, “The Matrilineal and Patrilineal Clan Lineages of the Mwera in Southeast Tanzania”, *Journal of the Faculty of International Studies, Utsunomiya University*, no.26, pp.1-20.
- [5] 阪本公美子、2008年5月「タンザニア南東部ムウェラの親族系譜—母系と父系に関する考察」日本アフリカ学会第34回学術大会。
- [6] SAKAMOTO Kumiko, 2008, “Mutual

- Assistance and Gender under the Influence of Cash Economy in Africa, Part 2” *Journal of the Faculty of International Studies, Utsunomiya University*, no. 25, pp.25-43.
- [7] 阪本公美子、2008年7月「南東タンザニア農村における相互扶助と生計戦略」日本貿易振興会アジア経済研究所「アフリカ農村における住民組織と社会」研究会.
- [8] SAKAMOTO Kumiko, 2008, “The Moral Economy in Endogenous Development”, *Contemporary Perspectives on African Moral Economy*, Dar es Salaam University Press, pp.165-179.
- [9] 大林稔・石田洋子編著、阪本公美子他5名(50音順)著、2008年『アフリカ政策市民白書2007—アフリカ開発会議(TICAD)への戦略的提言』晃洋書房.
- [10] 阪本公美子、2007年「東アフリカの内発的発展」西川潤他編『社会科学を再構築する—地域社会と内発的発展』明石書店、pp. 220-234.
- [11] 阪本公美子、2007年「赤道アフリカにおけるモラル・エコノミーと内発的発展」『アフリカ研究』70号、pp.133-141.
- [12] SAKAMOTO Kumiko, 2007, “Mutual Assistance and Gender under the Influence of Cash Economy in Africa”, *Journal of the Faculty of International Studies, Utsunomiya University*, no.23, pp.33-54.
- [13] SAKAMOTO Kumiko, 2006, “Women and men in changing societies: Gender division of labor in rural southeast Tanzania”, Paper Presented to the PEKEA (Political and Ethical Knowledge on Economic Activities) International Conference, Dakar, Senegal, December 2006 (<http://fr.pekea-fr.org/Dakar/D-T/T-D-Sakamoto.doc>).
- [14] 阪本公美子、2006年「赤道アフリカにおける小農のモラル・エコノミーに基づく内発的発展の可能性と課題」『宇都宮大学国際学部研究論集』第21号、pp.19-27.
- [15] 阪本公美子、2005年「開発と文化の調和对立—タンザニア南東部における地域・ジェンダー・世代—」『宇都宮大学国際学部研究論集』第20号、pp.15-28.
- [16] SAKAMOTO Kumiko, November 2005, “Endogenous Development and Moral Economy in Africa: In relation to subsistence and democracy”, paper presented to the PEKEA IVth International Conference on Democracy and Economy, Rennes (<http://fr.pekea-fr.org/Rennes/T-Sakamoto.doc>).
- [17] SAKAMOTO Kumiko, 2004, “Moral Economy and Endogenous Development”, *Tanzania Journal of Population Studies and Development*, vol. 11, no.2, pp.117-130; August, presented in an international conference on Perspectives on African Forms of Moral Economy, Sokoine University, Morogoro, Tanzania.
- [18] SAKAMOTO Kumiko, March 2004, “Endogenous Development and Moral Economy”, presented in a workshop on African Moral Economy, 京都大学.
- [19] 阪本公美子、2004年「タンザニアにおける「貧困」の歴史的形成」『混迷する国際社会と共生へのビジョン』、pp.115-136.
- [20] Kumiko Sakamoto, 2003, *Social Development, Culture, and Participation: Toward theorizing endogenous development in Tanzania*, PhD thesis submitted to Graduate School of Asia-Pacific Studies (GSAPS), Waseda University, granted PhD.
- [21] 三好皓一・阪本公美子・阿部亮子著、2002「プログラム援助とプロジェクト援助の二元論を越えて—タンザニアの事例から—」『アフリカ研究』第60号、pp.123-137.
- [23] SAKAMOTO Kumiko, 2001, “Social Development in Tanzania”, 『アジア太平洋研究科論集』第1号、pp.55-82、2001年4月.
- [24] 阪本公美子、1997「人間開発と社会開発」、西川潤編『社会開発』有斐閣、pp.113-136.

4. 研究成果

(1) 〔事例研究〕2010年度

タンザニアにおける「女性世帯主世帯」の生計戦略—タンザニア南東部の食料対策を中心として—(雑誌論文④⑤、学会発表⑦)

女性世帯主世帯は、脆弱な属性として議論されてきたが、その脆弱性はタンザニアのみならずアフリカ全般においても疑問視されつつある。本研究では、タンザニア南東部の2村の中心部に暮らす女性世帯主世帯における女性、並びにシングル・マザーの食料へのアクセスに焦点を当て、彼女たちの生計戦略を分析した。食料不足に関しては、女性世帯主世帯における高齢女性の脆弱性が顕著である一方、男性世帯主世帯におけるシングル・マザーに脆弱性は見られなかった。

しかし高齢女性は、食料不足の際、他人から食料を贈与してもらうことが多く、伝統的な知識に基づき森から食料を得ることもあった。他方、若い女性は、食料を補うため日雇い労働(キバルア)や小商いを行うことが

頻繁に見られた。家畜や土地所有に関しても、女性世帯主の女性、シングル・マザーの間でも差があり、彼女たちの多様性がみられた。

結論として、女性世帯主世帯やシングル・マザーの中で脆弱性はみられるが、コミュニティの規範の中におけるそれぞれの立場を利用した生計戦略が明らかになった。但し、コミュニティからの支援やそれぞれの自助努力が脆弱性を乗り越えるために充分と言えるのかどうか、彼女たち視点、並びにより広範な視点から、さらなる調査・研究が必要である。

(2) [事例研究] 2011年度

タンザニア南東部母系的社会における女性世帯主世帯と夫婦世帯の比較研究 (学会発表①、雑誌論文執筆中)

昨年度の研究を受け、タンザニア南東部の母系的社会における女性世帯主世帯(FHH)の脆弱性と自在性について、その多様性や主体性、食料へのアクセス、現金収入(所得・送金・養育)に焦点を当て研究した。より具体的には、タンザニア南東部R村において、第一に、FHH数と男性世帯主世帯(MHH)数を調査・集計し、第二に、FHH女性とMHH女性の比較のために全5町内会から各20人(FHH 10人 MHH 10人)をサンプルとして総計92名からの聞き取りによる質問票調査を行い、第三に、女性たちの視点の把握のため6名(寡婦2名、離婚・未婚各1名、既婚2名)のライフ・ヒストリーの聞き取りを行った。

第一に、調査の結果、R村全469世帯中、151世帯が女性世帯主世帯、318世帯が男性世帯主世帯であり、市場近くの町内会では女性世帯主世帯の88世帯中45世帯の51%であり最多であったが、もっとも遠い町内会では109世帯中23世帯の17%であり、他の3町内会では3割程度であった。

第二に、女性への質問票調査によると、食料が不足する期間が多く、またその場合、頼る人がいないのは、配偶者と同居していない未婚・離婚・寡婦が多い。収入は配偶者との同居による顕著な差はなかったが、子どもの養育は配偶者との同居や婚姻状況と関係して

いる場合が多かった。つまり、配偶者との同居・婚姻などを伴う既婚女性の場合の方が、配偶者が養育費を支払っている場合が、多かった。逆に送金は、配偶者と同居していない場合の方が得ていた。「人を助ける」かどうかは婚姻状況などとはかかわりなく、むしろ年齢や収入と関係があった。

第三に、現在の未婚女性の多くが相手の判断により未婚であるのに対し、植民地時代に妻方居住にて生活した寡婦のライフ・ヒストリーによると、彼女は配偶者候補が婚労働に来て、子どもをもうけたにもかかわらず働きが悪かったため結婚を拒否した、という集村化・夫方居住化した現在ではみられない経験をしていた。他方、現代の40歳代の離婚・未婚女性はそれぞれの生活で農業や収入確保に創意工夫をしていたが、畑仕事と家事の分業ができないなどの困難もあり、裕福とはいえないが結婚生活に満足をしている夫婦世帯と対照的だった。

上記のとおりR村におけるFHHの実態を、村の全容、夫婦世帯との比較、女性たちの立場から明らかにした。

(3) 社会構造の研究、比較研究、理論研究

なお、2年間でやってきた事例研究とともに、女性世帯主世帯の状況に影響をする調査地の社会構造、他地域の事例研究、そして理論研究もすすめてきた。

まず、調査地の社会構造については、母系と父系の関係(雑誌論文③)、家畜と生業(雑誌論文①、学会発表⑥)、ジェンダーと現金経済(図書①)について研究を行い、発表してきた。

比較研究としては、タンザニア内の比較研究(学会発表④)に加え、日本の事例にも焦点を当て、アフリカを参照した理論的考察も行ってきた(雑誌論文②、学会発表②③)。また、事典の監訳を通して貧困関連の事項に関する先行研究を把握・発信(図書②)、ならびに、研究事例と発展のあり方に関する考察も行ってきた(学会発表⑤)。

以上、女性世帯主世帯に焦点を当てた事例

研究、並びに調査地の社会構造に関する研究を、他事例と比較・位置づけしながら、理論的にも考察してきた。すなわち、女性世帯主世帯がタンザニアの中でも極めて多い南東部の事例において、歴史的変容と現代的状況を明らかにしてきた。歴史的な経緯については、歴史をさかのぼった母系と父系の系譜も精査しながら、近年のウジャマー集村化に伴う妻方居住による社会構造の崩壊、そしてそれに伴う女性の生き方の変容がみられた。女性世帯主世帯は、食料生産が現在も主要な基盤的生産活動である中、逆境に立たされながら、現金収入の獲得による創意工夫により生計戦略を立てる女性、ネットワークに頼れる女性など、さまざまであった。さらにタンザニア南東部の女性たちの事例も内包したアフリカの生活のあり方をよりどころとし、日本との比較も行い、今日の発展のあり方にも言及してきた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 5 件)

- ① 阪本公美子, 2012, 「家畜が重視されない農耕社会」『アフリカ・モラル・エコノミーを基調として農村発展に関する比較研究』 pp.75-92.
- ② 阪本公美子, 2012, 「原発震災を転換期として見直す開発のあり方—公共圏と国際学への示唆—」『宇都宮大学多文化公共圏センター年報』 4 号, pp.41-53.
- ③ 阪本公美子, 2011, 「タンザニア南東部『母系制社会』の母系と父系に関する一考察」『アフリカ研究』 78 号, pp.1-23 (査読あり) .
- ④ SAKAMOTO Kumiko, 2011, “Are Female-Headed Households More Vulnerable? From Livelihoods Strategies within communities of Southeast Tanzania” *Journal of the Faculty of International Studies, Utsunomiya University*, No.31, pp.77-97 (査読あり) .
- ⑤ 阪本公美子, 2010, 「タンザニアにおける『女性世帯主世帯』の生計戦略—タンザニア南東部の食料対策を中心として」『宇都宮大学国際学部研究論集』 30 号, pp.1-15. (査読あり) .

[学会発表] (計 7 件)

- ① 阪本公美子, 2012 年 5 月 27 日, 『タンザニア南東部コミュニティにおける女性世帯主世帯の脆弱性と自在性』日本アフリカ学会第 49 回学術大会、国立民族間博物館
- ② SAKAMOTO Kumiko, 2011 年 12 月, “The African Moral Economy and Modern Japan”アフリカ・モラル・エコノミー研究会、京都大学 (招待講演) .
- ③ 阪本公美子, 2011 年 11 月 「3.11 原発震災を受けて—アフリカ研究者・親として」国際開発学会全国大会.
- ④ SAKAMOTO Kumiko, 22 Aug 2011, “Moral Economy and Diversities within Tanzania: Comparison Focusing on the Case of Matrilineal Peasants,” Rural Development Policy and Agro-pastoralism in east Africa, African Moral Economy Research Project, University of Dodoma, Tanzania.
- ⑤ 阪本公美子, 2010 年 12 月 18 日, 「発展のパラダイム転換—タンザニアの経験から—」アフリカ・モラル・エコノミー研究会、京都大学 (招待講演) .
- ⑥ 阪本公美子, 2010 年 12 月 19 日, 家畜が重視されない農耕社会」アフリカ・モラル・エコノミー研究会、京都大学 (招待講演) .
- ⑦ 阪本公美子, 2010 年 5 月 29 日, 「タンザニア南東部における『女性世帯主世帯』の特徴と生計戦略—食料不足を中心に—」日本アフリカ学会第 47 回学術大会、近畿大学.

[図書] (計 2 件)

- ① SAKAMOTO Kumiko, 2012, “Moral Economy, Cash Economy, and Gender: The Case of Rutamba Villages, Lindi Region, Southeast Tanzania”, S. Maghimbi, I.N. Kimambo and K. Sugimura eds. *Contemporary Perspective on Moral Economy: African and Southeast Asia*, Dar es Salaam University Press, pp.185-294.
- ② メフメド・オデコン編集代表、駒井洋監修、穂坂光彦監訳者代表、阪本公美子他 12 名監訳, 2012, 『世界格差・貧困百科事典』明石書店.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

阪本 公美子 (SAKAMOTO Kumiko)
 宇都宮大学・国際学部・准教授
 研究者番号: 60333134